

開催地名：和歌山県和歌山市	
開催日時	令和2年2月17日（月） 14：30 ～ 16：00
開催場所	和歌山市消防局
語り部	松田 富子 （岩手県遠野市）
参加者	和歌山市婦人防火クラブ連合会 約100名
開催経緯	南海トラフ地震の発生が高い確率で予想されているが、婦人防火クラブとして具体的な活動準備ができていない。今回、元遠野市婦人消防協力隊所属の語り部の講演を受けることで、今後の活動の糧としたい。
内容	（１）はじめに 岩手県遠野市は、東日本大震災発生時、被害の大きかった地域に向けて精力的に後方支援を行った。当時私は 遠野市婦人総合消防協力隊に所属していた。 遠野市は古くから交通と交流の要衝として、多くの人と物と心の結節点として発展してきた。また活断層もなく、花崗岩地質で安定した地盤を持つ遠野市は、古くから災害に強いまちとされていた。平成19年には地震、津波災害における後方支援拠点施設整備構想をまとめ、いつ起こるか分からない災害に備えてきた。そのような環境下で、平成23年3月11日、午後2時46分、国内観測史上最大級の地震が発生した。国内の最大震度は震度7で、遠野市でも震度5強を観測し、市内の至る所に被害を及ぼした。市役所本庁舎中央館は全壊し、市内全域で停電も発生したのみならず、道路や水道などのインフラも甚大な被害を受けた。 （２）支援活動 発災から11時間後の3月12日午前1時40分、1人の男性が大槌町から峠を二つ越えて災害対策本部に飛び込んできた。現地の凄惨な被害状況を語り、窮地を訴えた。歴史的にもつながりが深く、多くの親類縁者がいる隣町の窮地を見捨てるわけにはいかないとの思いから、市内に備蓄してあった物資を集め、明るくなるのを待って職員が現地へ出発した。この動きが後方支援活動の始まりとなった。また、翌13日には後方支援活動の本格化を図るため、遠野市後方支援活動本部を設置。その後は職員を被災自治体へ派遣し、現地での支援に当たった。さらに3月28日に、継続的な支援活動の展開を図るため、沿岸被災地後方支援室を設置し、被災地への支援を続けた。 遠野市の活動は、行政だけではなく多くの市民と心を一つにした官民一体の後方支援活動へとつながった。被災地へと届けられた炊き出しのおにぎりは14万食にも上り、そのほとんどが、地域の人たちが持ち寄ったお米を、日赤奉仕団や地域婦人団体協議会などの人たちが心を込めて握った。停電で電気釜が使えないためガス釜を5個使い、18升の米を1日に6～7回炊いた。ラップの上か

ら握り、皆「熱い、熱い」と言いながらも心をこめて握った。市民が率先して提供した物資は、駆けつけた高校生たちが仕分けをし、被災地のニーズの把握に努めながら送り届けた。

また、発生から 11 日後の 3 月 22 日からは、市民ボランティアを被災自治体へ派遣し作業に当たった。市内の入浴施設の無料開放やバスの送迎など、近隣市町村だからこそできる身近な支援活動を展開した。ボランティア活動は、民間ならではのスピード感で、被災地のニーズにあった支援活動が展開されるとともに、国内外からの多くのボランティアを受け入れ、被災地での復旧復興支援活動に尽力した。大人だけではなく子どもたちも、自分たちにできることを考えながら支援活動を行った。

(3) 最後に

大災害が発生したときには、公助は遅れる。そのため、発災後しばらくの間は、自助と共助で乗り切る必要がある。その意味でも、コミュニティの果たす役割は重要である。平時には、子どもから高齢者まで参加して訓練を行い、地域での人と人のつながりを強めることで、共助意識を高めていただきたい。また、地域での日常のつながりが、非常時には必ず役に立つと信じていただきたい。「津波でんでんこ」という考えも大切だと思う一方で、皆さんには、隣の高齢者や子どもの手を引いて逃げることも望みたい。皆さんには是非、まずはコミュニティを大切にしていきたいと切に思う。



開催地より

遠野市婦人消防協力隊としての支援活動を始め、遠野市の方々の後方支援活動について詳しくお話をいただいた。その温かい支援によって、激務の中、癒された方々も多くいらっしゃると思う。当市の婦人防火クラブ連合会にも、今日のお話を今後の活動に役立ててほしい。